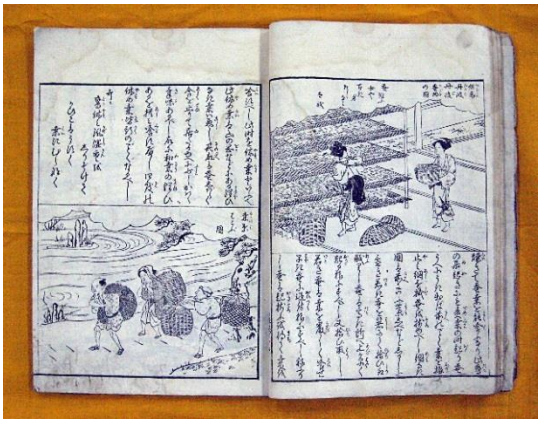
蚕糸業の発展に尽力した大屋の先覚者たち

（社会教育課）

１、養蚕の神様と呼ばれた上垣守国

大屋町蔵垣には、江戸時代後期に上垣守国（1753-1808）、通称名を伊兵衛という人がいました。蚕種（蚕の卵）を改良してよい繭を生産する取組みを行い、但馬（兵庫県北部）をはじめ丹後（京都府北部）や丹波（兵庫県中部・京都府中部）に広め、この地域の養蚕や製糸、絹織物の発展に貢献しました。上垣守国の『養蚕秘録』という本は、日本の国内だけではなく、フランスやイタリアで出版されました。日本の養蚕技術を海外に広めた偉人であり、大屋では養蚕の神様と言われています。



上垣守国著『養蚕秘録』

明和７年（1770）４月、上垣守国は 18 歳の時、養蚕・製糸・織物業の先進地であった群馬県高崎市（上州）から伊勢崎市境島村付近を通り、さらには優秀な蚕種の製造地として有名な福島県伊達市（奥州福島地方）を訪れました。養蚕技術を見たり聞いたりするとともに、蚕種の買い付けを行っています。

村人に講義する上垣守国『養蚕秘録』より

帰国した上垣守国は、大屋の人を集めて群馬県や福島県の蚕糸業の進歩や発展を詳しく説明しました。福島県から持ち帰った優れた蚕種を使って蚕を育て、その蚕から蚕種を生産して販売し、但馬地方で優れた繭を広めました。この作業を蚕種製造といいます。1 年おきに福島県から蚕種を購入し、それを原種として蚕種製造を続けました。

福島県伊達市梁川町伏黒村の藤屋佐藤与惣左衛門家に残る『蚕養記』には、寛政９年（1797）６月に蚕紙 103 枚を金 9 両 50 文で上垣伊兵衛（上垣守国）に販売した記録が残っています。また、弟の上垣宇右衛門といっしょに桑の木の栽培の研究を進め、桑の木のとり木法・つぎ木法の指導も行っています。

福島県伊達市梁川町の伏黒村（伊達市提供）

上垣守国によるこれら養蚕技術の改良と普及事業は、大屋から養父市、そして但馬全域に広がりました。但馬の生糸は品質が向上し、丹後ちりめんの原料糸として使えるようになりました。このことが、江戸時代後期以降、三丹地方（但馬・丹後・丹波地方）における蚕糸織物業の隆盛に繋がったといわれています。

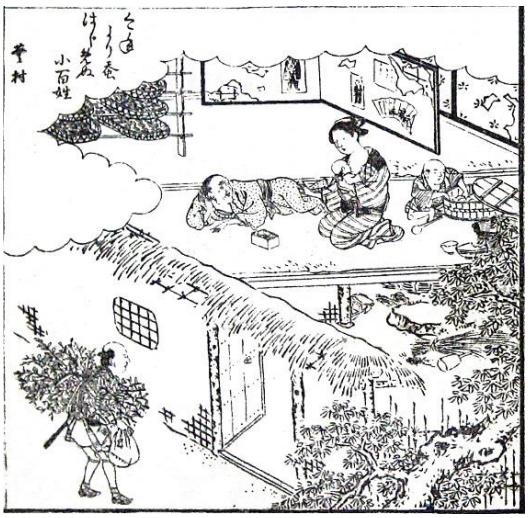
上垣守国は、貧しい農民の暮らしを養蚕によって豊かにするために、養蚕技術を研究して世の中に広めました。享和３年（1803）に養蚕の技術書である『養蚕秘録』３巻を江戸・大坂・京都で出版しました。

上巻では養蚕の起源を説明し、蚕名、蚕種、栽桑、蚕飼の道具を図解しています。中巻では孵化、掃き立て、給桑、上簇、繰糸など全般を解説しています。下巻では真綿製法、養蚕の話題を書いています。

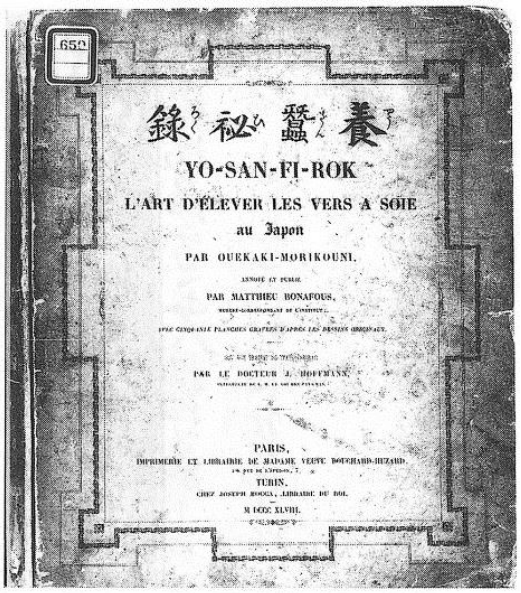
上垣守国は、福島県伊達市に通う途中で、養蚕の実態を研究し、兵庫県・京都府（但馬・丹後・丹波）、滋賀県（近江）、長野県（信州）、群馬県（関東辺）、福島県（奥州）などの養蚕を比較検討しました。また養蚕技術向上のために多くの養蚕仲間と交流しました。

『養蚕秘録』には、「上州碓氷郡（群馬県高崎市付近）の貧乏な農民が、小さな畑に少しの桑の木を植えて養蚕を始め、熱心に養蚕を研究し、後に高崎市付近でも裕福な養蚕農家になった」という話を紹介しています。養蚕を行って貧乏な農業から抜けだそうという上垣守国からの激励の言葉です。

『養蚕秘録』は文政 12 年（1829）シーボルトがオランダに持ち帰り、嘉永元年（1848）オランダ王室通訳官ホフマンによってフランス語に翻訳されてチマラン農学校長ボナフォーが序説と注釈をつけてパリとトリノで出版されました。その後にイタリア語でも出版されました。当時の日本は、江戸時代の鎖国の時代でした。外国の圧力で開港が始まり、近体的な技術が日本に入ってきました。上垣守国の『養蚕秘録』は、日本の養蚕技術が科学的であることから、高く評価されました。日本の養蚕技術がヨーロッパの養蚕振興に貢献したということで、日本文化の輸出第一号と評価されています。



上州碓氷の村人の話『養蚕秘録』



フランス語版『養蚕秘録』

上垣守国の墓地

上垣守国は天明３年（1753）から蔵垣村の庄屋を務めています。そして、文化５年（1808）に 56 歳で亡くなりました。戒名（かいみょう）は「随真院栞誉聞廣度居士（ずいしんいんそうよぶんこうどこうじ）」と付けられました。蔵垣村の上垣家の墓所（ぼしょ）で今も静かに眠っています。

大屋の養蚕農業は平成 3 年（1991）で行われなくなりましたが、現在も養父市立上垣守国養蚕記念館では 5 月後半から 6 月前半に蚕の飼育を行っています。

上垣守国養蚕記念館

〈上垣守国の事跡〉

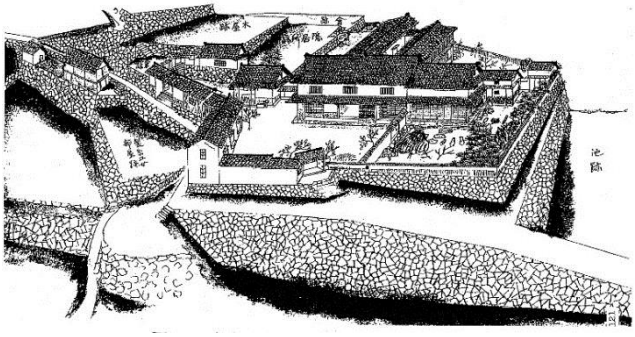
時　期		上垣守国の事跡
宝暦 3 年	1753	蔵垣村に誕生する。上垣伊兵衛という。
明和 7 年	1770	4 月に陸奥福島で蚕種を仕入れ、大屋谷養蚕の原種とする。18 歳。
安永元年	1772	養蚕業を但馬と丹波、丹後に普及させる。
天明 3 年	1783	蔵垣村の庄屋となる。
天明 5 年	1785	弟　上垣宇右衛門に陸奥行きを代行させる。
寛政 8 年	1796	上垣守国が、筏村で鯨魚石を拾う。
寛政 9 年	1797	出石藩の許可を得て気多郡奥佐野村納屋に蚕室を設けた。屋号を仙栄堂として、蚕種紙の製造販売や絹糸を販売する。伊達郡伏黒村藤屋の佐藤与惣左衛門家で 103 枚の蚕種を仕入れる。代金は金 9 両 50 文であった。
享和 2 年	1802	養蚕秘録 3 巻を著す。48 歳。
享和 3 年	1803	養蚕秘録を出版する。出石藩主仙石侯に書を献じ米を賜う。 水害のため奥佐野村の蚕室を撤去し、蔵垣の自宅で蚕種製造する。
文化 5 年	1808	8 月 19 日病にて死去。56 歳。
文政 12 年	1829	オランダ東インド会社のシーボルトが、養蚕秘録をオランダに持ち帰る。
嘉永元年	1848	フランス政府が養蚕秘録をフランス語訳し、パリとトリノで出版する。その語イタリア語訳される。
明治 16 年	1883	近畿中国四国一府十三県連合会繭糸織物共進会で農商務大臣西郷従道より追賞証を授与される。
明治 22 年	1889	兵庫県繭糸共進会で兵庫県令内海忠勝より追賞状を授与される。
明治 30 年	1897	八鹿村に兵庫県立簡易養業学校が創立され、教科書に養蚕秘録が採用される。
明治 40 年	1907	上垣守国翁百年祭を蔵垣宝幢寺で挙行する。
明治 42 年	1909	宝幡寺に上垣守国紀蹟碑を建立する。
昭和 25 年	1950	大日本蚕糸会兵庫県養蚕連合会が、上垣守国没後の 150 年墓前祭を行う。
平成 7 年	1995	大屋町、上垣守国養蚕記念館を開館する。
平成 17 年	2005	養父市、かいこの里交流施設を開館する。

２、出石藩から褒美を受けた正垣半兵衛

正垣伴兵衛が開墾した東山の畑

大屋町糸原の正垣半兵衛（1770-1874）は、上垣守国の影響をうけて 28 年間にわたって福島県まで蚕の卵である蚕種を買にいきました。良い蚕を育て、よい繭をとって、よい絹糸を作るためです。大屋富士と呼ばれる東山の山麓（さんろく）を開墾して、3,000 歩（9,900 ㎡）の桑畑を作りました。大屋では最大の桑畑の開拓となって昭和 40 年代まで利用されました。

文政２年（1819）出石藩主仙石久利（せんごくひさとし）は、養蚕振興に尽くした業績を認め、出石藩から三人扶持（ふち）の給料を与えると共に、武士と同じように刀を身に着ける権利（帯刀（たいとう）許可）を与えて、功績を賞賛しています。



小倉屋敷の図（『ふるや』より）

３、近代製糸業の先駆者となった小倉寛一郎

大屋町古屋（現在の大屋町和田）の小倉寛一郎（おぐらかんいちろう）（1858-？）は、明治 9 年（1876）19 歳で自宅の敷地に独力で、片手取りの坐繰式（ざくりしき）20 釜による製糸場を創設しました。小倉家は、広大な山林や田畑をもつ財産家でした。豊岡市但東町で赤花製糸場を設立した橋本龍一の影響をうけて、小倉寛一郎は、新しい時代の産業である製糸場を建設しました。

群馬県にある富岡製糸場

明治 11 年に水車動力に変更し、明治 13 年には政府が営んでいた富岡製糸場を視察して渋沢栄一（しぶさわえいいち）から教えを受けました。そして、明治 14 年（1881）５月には 12 馬力の蒸気動力によるボイラー式 50 釜を設置して器械製糸を開始しました。国内ではボイラーが簡単には生産できない時代です。特別に神奈川県に作られた明治政府の横須賀工廠（こうしょう）（軍の工場）に依頼して製造しました。しかし、明治 22 年（1889）経営に行き詰まって廃業しました。

明治５年、富岡製糸場が建設されて間もない時期に、山間部の大変不便な大屋で、個人の才覚だけで器械製糸工場を作りました。大屋の活発な養蚕と繭の生産に注目し、製糸場に取り組んだ偉大な先駆者です。小倉寛一郎は、明治 11 年に群馬県の田島弥平（たじまやへい）に紹介を受けて皇居の養蚕所を見学しました。そして、明治 14 年には渋沢栄一を支援して、神奈川県の横浜生糸預所（あずかりじょ）の開設に尽力しています(『三丹蚕業郷土史』)。小倉寛一郎は、豊岡市但東町の橋本龍一（はしもとりゅういち）とともに関西地方における近代的な器械製糸業の先駆者と呼ばれています。